

村田沙耶香『しろいろの街の、その骨の体温の』

村田沙耶香は現在もっとも注目されている作家のひとりであり、芥川賞を受賞した『コンビニ人間』がよく知られているが、彼女の最高傑作は『しろいろの街の・・・』である。新しい家が次々に建てられていく新興住宅街を、主人公である谷沢結佳は「しろいろの街」あるいは「骨の街」と表現するのだが、そこには救いようなない憎悪が籠められている。

小学校の三年生から仲のよかった若葉、伸子、結佳は高学年になるにつれて、その違いが際立っていく。表向きは普通の女の子に見える結佳には、習字教室で仲が良くなった男友達の伊吹がおり、小学校の四年生のときにキスをして「伊吹はわたしのおもちゃ」とまで言うようになる。

中学生になると、三人の人間関係は一変する。クラスの女子にはカーストが形成され、若葉は最高のカースト、信子は最低のカーストになる一方で、結佳は下から二番目の「おとなしい」カーストに落ち着いていた。最高順位の女の子は小川さん、最低順位の女子は馬堀さんだ。下位の女子が出しゃばった振る舞いをするのは許されない。一方、男の子は下位の女子を汚い、臭い、醜いと言って罵倒した。結佳もクラスの男子にはバカにされ、からかわれたり蔑まれたりする日々を送っていた。次の一文はクラス内の状況を見事に表現している。

「私はガラスに映った自分の窪んだ目から必死に目を逸らしながら、吐き気を堪えて微笑み続けた。」

伊吹はサッカーが上手く、かわいいとの評判で、高い順位を占めていたが、クラスにカーストがあることにも気づかないほど鈍感だった。誰も見ていない時に、結佳は伊吹を変わずに「おもちゃ」としてあつかい、女子便所に連れ込んでキスをするほどだった。

やがて三人の立場は男子をめぐるって動いていく。最高順位の小川さんが伊吹に好意をもつにもかかわらず、若葉は伊吹に告白したことから、小川さんの怒りを買って失脚する。信子は罵倒された挙句にクラスの男子を攻撃し、ますます孤立する。そして結佳は伊吹の家で伊吹の精通を誘引するのだが、伊吹の家に行ったことがクラスで知られ、完全に仲間外れにされる。ここにいたっては、三人はいずれも没落しながら、その関係もさらに崩れていく。没落して近づいてくる若葉を、結佳は拒絶する。信子は結佳に「私のことをバカにしているでしょう」と言い、結佳は「うん」と言ってしまう。

しかし、クライマックスに向けて結佳と信子は行動する。結佳は自分を蔑んできたクラスの井上に殴り掛かり、パンチを一発あてることに成功する。信子は結佳につかみかかり、「死ね」と言う。そして、最後に結佳は伊吹を自分の家に招き、結ばれる。

この小説を読んだとき、私は川上未映子の『乳と卵』、そして『ヘヴン』を想起した。いずれも日本文学の最高傑作であるから、作者も影響を受けたと推察される。しかし、『しろいろの街の・・・』の主人公は『ヘヴン』と比べて、ただいじめられるだけではない。結佳は最後にはカーストに逆らい、最高順位の女子が恋焦がれた伊吹を自分のものにする。

ここから、この作品を動物社会学的に考察してみよう。多くの動物では、個体間に順位が形成され、優位な個体は食物や異性を獲得する。人間は長い歴史の中で、順位、身分、カーストを発達させてきたが、これも劣位の個体を退けて資源をえるためである。したがって、それが学校のクラスであらわれることに不思議はない。実際、学校内カーストは現代日本で社会問題になっている。

カーストの分かれ方は動物や集団によって同じでない。高順位の個体間では序列が明確に決まることが多いが、それだけ順位のちがいによって利益が異なるからであろう。川の流れる中で、流下する虫を食べるサケ・マスの仲間は、順位によって一列に並ぶことが多く、先頭に近いほど多くの餌を食べることができる。一方で下位の個体間の順位は明確でないことが多い。えられるものが小さいので、順位をきめる必要がないからであろう。

その点で『しろいろの・・・』で、クラスの女子にいくつものカーストが形成され、最下位の生徒まで明確に決まるというのは人間らしい。人間ではいじめによって快楽を覚えることが、ホルモン分泌からも確かめられており、上位であろうと下位であろうと、いじめやカーストが生じやすい。一方で、いじめによって快楽以外のものがえられるかという疑問である。カーストによって成績や進学が決まるわけでもなければ、必ず異性を獲得できるわけでもない。

この作品では下位の女子が人気の高い男子と付き合うことは許されず、この点に関連して結佳は幾度もバカにされている。しかし、結佳はクラスで人気の高い伊吹を性的なおもちゃとして扱い、小学校でキスをし、中学校では「つきあいたい」と言わせ、最後には結ばれている。サルの繁殖では、ボスの子を宿したメスザルが高い順位を占めることがある一方で、ボスが見ていない場所で劣位のオスザルがメスと交尾することが多く観察されている。劣位のオスでも自分の遺伝子をもつ子を残すことができれば、社会生物学的には成功である。

結佳の行動について、哀れだとか、悲惨だとか言うことは容易だが、本作品のメッセージはそうではないように思う。私が評論で権力やいじめについて考察してきたことから見直すと、結佳は自分では醜いと思っているが、学習塾で伊吹と仲良くなり、性的な関係にまで発展させる点で、他の女子にはない積極的な能力を持っている。カーストに埋没するのではなく、その陰で伊吹と親しくなり、最後には気に食わない男子に殴りかかっている。そのくらいなら、カーストが形成される段階で、自分のカーストを上げることもできただろうに、と思ってしまうが、人間はすべての点で能力を発揮できるわけではない。結佳の激しい感情と行動は、この小説の救いであるが、男の子を殴っても、伊吹を自分のものとしても、彼女はさほど救われていない。カーストによる傷跡はそれほど大きなものであり、仲が良かった女友達との関係は切り裂かれたまま、最後まで修復されずに終わっている。

結佳が住む街では、新しくてきれいな家が同じように立ち並ぶ。幸福に包まれているように見える家庭の実情はそれぞれ異なり、子供たちはさまざまな葛藤に悩まされているが、それに親も教師も気がつかない。孤立した子供たちは、学校でカーストの中で憎みあっている。しかし、やがて子供たちが社会に出ると、クラスのカーストは何の意味もなく消えていく。

それは、しろいろの街が透明になり、蒸発するようなものだと言えるかもしれない。残されるものがあるとしたら虐げられた記憶であり、修復できないまま放置された人間関係であろう。

村田沙耶香は本作品で三島賞を受賞したのち、『コンビニ人間』を書いて芥川賞も受賞し、一躍世に知られることになった。このほか、『消滅世界』や『殺人出産』もおもしろいが、えげつないという批判があるかもしれない。しかし、私には、文章技巧に走るのではなく、伝えたいメッセージが直接的でわかりやすい村田沙耶香の作風は新鮮で魅力的である。『コンビニ人間』では、大企業のもとで健気に生きる女性という視点が好感を持たれたと思われるが、他の作品とは作風が異なっている。「この程度のものを書けば、芥川賞なんか取れるでしょう」と言っているように思われる。そんなことまでやってのける村田沙耶香の今後の楽しみである。

村田沙耶香（2015）朝日文庫

片野 修